

第74回日本書芸院展で最高の『史邑賞』をいただいて！

29期 竹本治男(大鶴)

書道人生を送っている私にとって栄誉ある賞をいただき喜びに堪えません。

受賞作品は、江戸時代中期の儒学者、伊藤東涯の漢詩を170cm×70cmの画仙紙に横書きで仕上げました。

中国の北宋の時代の米芾(べいふつ)の書風を基調に、流動的かつ余白美を大切にして書きました。横作品は初めての試みで苦労しましたがチャレンジの大切さを知りました。

思えば40年余り前から毎年この「日本書芸院展」に出展してきました。

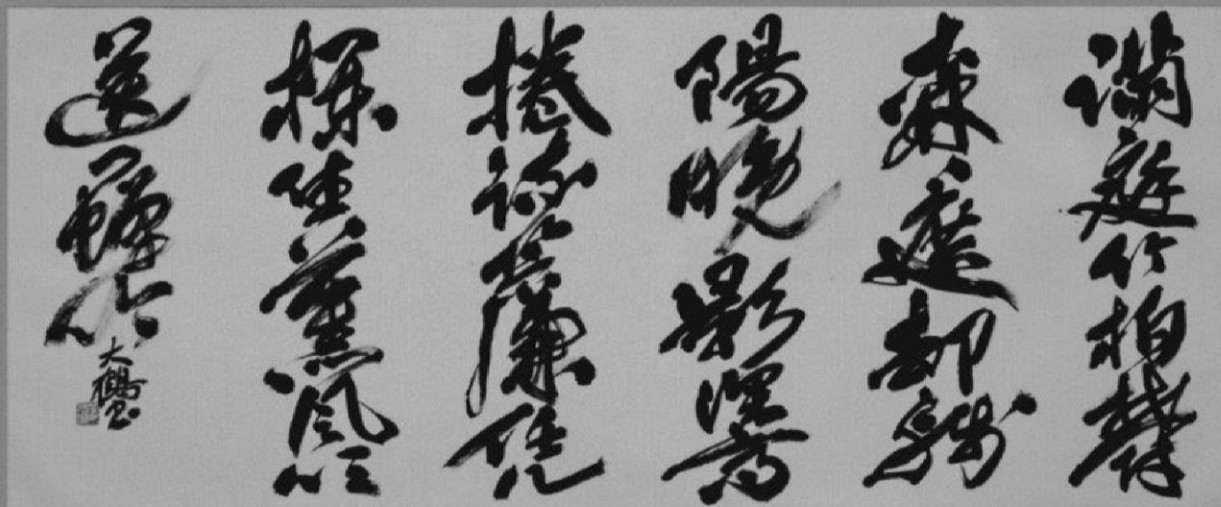
昭和21年創立の全国約1万2千人の会員を擁す全国屈指の書道展で「史邑(しゅう)賞」は初代会頭の辻本史邑(1095～1957)の功績を称え設けられた最高賞です。公募→2科会員→1科会員→無鑑査会員→2科審査会員→1科審査会員と6ランクの昇格基準があり1科審査会員の中から1291人が出展。73人の受賞と狭き門でした。

「継続は力なり」と言われていますが、目標に向かってコツコツ精進することの大切さを改めて痛感しました。

2020(令和2年)10月27日 記す



受賞作品



第七十四回 日本書芸院展
史邑賞 竹本 大鶴

第七十四回日本書芸院展（2020）史邑賞受賞

（題名）

納涼

納涼 のうりよう

（伊藤 東涯）

満庭竹柏鬱森森

満庭の竹柏 鬱として森森たり

遮却残陽晚影深

残陽を遮却して晚影 深し

高捲疎簾凭欄座

高く疎簾を捲き 欄に凭りて座せば

薰風吹送一蝉吟

薰風 吹き送る 一蝉の吟

（語意）

庭いっぱい竹柏が茂って高くそびえ立ち、夕陽をさえぎって夕刻の影が濃くなる。あらく編んだすだれを高く巻き上げ、欄干に寄りかかって座っていると、さわやかな風が、一鳴きする蝉の声を吹き送ってくれる。夏の夕涼みの情感を詠じた詩。

令和二年九月吉日

竹本 大鶴

賞状

漢字部

竹本大鶴

第七十四回日本書芸院展に出品の
貴作品は史邑賞選考委員会に
於て特に優秀として推薦された
のでここに史邑賞を贈りその
栄誉をたたえます

令和二年七月三十日

公益社団法人 日本書芸院



*事務局より

北辰会の事務局員である 29 期竹本さんが 2020 年 74 回日本書芸院展で最高の「史邑賞」を受賞され喜びに堪えません。ご本人が語られている様に、40 年の努力の積み上げとご本人の能力、そして出展の際の 100 枚から 800 枚位に及ぶ習作を重ね出展に合わせ日夜精進されているようです。

北辰会が再出発した歴史より長く努力され、尚且つ段々能力を高め、道を極める努力に北辰会も学びたいと思います。北辰記念室に展示の書、北辰会総会時の看板類の書は竹本さんが書かれたものです。北辰会の宝物に成ることでしょう。益々のご健康とご活躍をお祈り致します。